

劇あそびの研究について

菊 田 要

通の観点に立つこともできるだろうと考えたわけです。

その次に考えたのは楽しみながら進めていきたいということです。どうも研究とか勉強とかいうとむこう鉢巻でしかめっ面してやることのように思いこんでいる。だからみんなイヤがってしまふ。そうでなくニコニコと明かるい顔して喜びながらやっていきたい。それにはこの研究が幼児教育の根本になる重大な要素をもっていることを知ってもらふことである。そうすればはいあいを感じて、毎日の生活が生きがいあることになろうと考えました。教師として当然のことだと、淡々とした心構えで進めたいと思ったわけです。

そんなわけでこの二つの点を大切にしながら約十カ月続けてきました。どんなこともこの二つのたてまえを揺がさずに来たつもりです。

劇あそびの研究をしようということになったのは昨年の一月頃でした。それまでにまたびたび幼稚園の職員会などで、教育的

な演劇とはなにかについて話しあう機会はしばしばありました。わたしはわたしなりの見解を述べ基本的な問題についてはさうとう話しあつたつもりです。そんなことから四月の新学期になったら試みてみようということになっているところへ、都教育委員会

の指導部から研究協力校を引きうけて

やって欲しいとの話がありまして、どうせやるならということでお引き受けし今日に至つたわけでありませう。

そこでまず第一に考えたのはみんなで話し合いながら進めていこうということですが、できるだけみんなが目標をあやまらずに、納得しながら研究を運んでいきたいし、その上になつてこそ独創的な方法も生まれていくだろう、またどんな小さな事例でも大切に、検討しあふことによつて共

いま、みんなで話しあってどんな成果があったらうかと考えてみると、演劇のものになる身体的行動、コトバとからだによる表現に基づいて、あやまりのない方向に進めてきたという自信をもてたということ、こどもを開放しこどもの現実を捉えていくことから、実体をつかまえてきたと思うこと、そのこどもの現実に基づいた生活指導がキチンキチンと積み重ねられてきたと思うことなどがあります。まあ、だれひとり健康を害なわずにいそいそと励んでいることもしあわせだと思っています。

さて、ここで研究の内容の一端を述べましょう。各組の担任が記録した中からいくつか採録してみます。

始めにコトバについて調べてみました。教師とこどもとの話しあいでは「おうちのこと」についてです。テープに録音したの

で、そのマイクが気になってだいぶ抵抗を感じたようです。誰と誰とがいて、お仕事はどのような内容でしたかうまくいきませんでした。ただこのことを通して二年保育の年長児と年少児との、コトバの構成上の差がわかりました。つまり年少児は単語をおとうさんとかおかあさんとかいうのに対して、年長児はおとうさんそれからおかあさんというような表現をします。それをテープに録音してききなおすことがいかに大切かということがわかりました。なまの話しは生活の必要からいっているのですが、コトバとして客観化したとらえ方ができま

せん。録音でなんべんもきいているといろいろな点がハッキリわかってくるもので研究に大いに役立つことを知ったのです。

話しあいはしばらくつづけられ、おまつり、かんのんさま、えんそくなどがあります。方法としてもオモチャの電話器をつか

って、電話あそびなどの方法もとりました。こうするといくらか楽な気持ちで話せるようです。

つぎに一本の棒を持って連想あそびをしました。これは教師がやって見せたり、こどもがやったりして表現しました。野球のバット、釣り竿、刀、鉄砲、など二十通りぐらいは引き出せたようです。つづいて抽象的なものとして針金で円と正方形をつくり、これも同じような連想あそびの素材にしました。円についてはハンドル、ダイヤル、肝油、眼玉焼、ふうせん、はなのあなど六十三も出ました。

それから動物しらべをしました。どのくらい知っているか、どんな性格をとらえているかなどを知りたいと思ったのです。好きな動物として四十あまり、いろいろな動物として三十あまりがあげられました。男児と女児ではいくらか違いがありま

すが、好き方を順にあげますと、うさぎ、ぞう、きりん、りす、ペンギンなどがあり、きらいな方ではライオン、へび、とら、ひょう、かばなどがありました。これをもとにして動物の出でくるエチュードを考えることにしました。こどもは動物になつてあそぶ方が好きです。これはなまの生活は抵抗があるのではないかしらと思つています。つまりこどもなりに想像の世界へ自由にはいれるということのように思われるのです。

そこで動物のかぶりものをつくりました。これは運動帽に、ウールのはしぎれを用いました。ウールのはしぎれは問屋から見本の不用になったのをたくさんらつたので、適当なものを自由にえらぶことができました。

それを始めてかぶつた時の年少組の喜びを記録から伝えましょう。

「きょうはとてもいいものを持って来ますから待っていらっしやいね。」とこどもに話し、動物のかぶりものを職員室から持ってくる。廊下でニワトリのかぶりものをつけ、コケコッコとなきながら保育室にはいる。「ウワッ、にわとりだ」と歓声をあげてよろこんだ。「では先生は動物園の園長さんです。」と室の入口を動物の幼稚園の入口にした。それからこどもの好きなかぶりものをつけさせる。「ハイ来て下さい。お早うございます。」「ビイビイ。」「だれと来ましたか。」「ビイビイ。」「なにであそぶ。」「ビイビイ。」この子はヒヨコになりきつて、なにをきいてもビイビイと答える。「こんどは犬さん。犬さんこんにちは。」「ワンワン。」「犬さんかぜひいて休んでいましたね。」「ワンワン。」この子はふだん元気が、かぜで休んでいてきょう久しぶりに出て来たのでよい表現ができない。

いままで、指されるといやいやながらしていたこどもが、かぶりものをつけてやたら進んでできて、この帽子はよいといひ出した。だれもが動物になりきつた。猿はかぶりものをつけチョッキ(チョッキの後)に尾を縫いつけたもの)もつけてみたら、「先生ぼくいすにすわれないよ。」と泣き出した。年少児はかぶりものだけでチョッキはいらないと思つた。

一端を述べましたが、こんな素朴なやり方で始めて、いまエチュードをいろいろな形でやっているわけです。

そこで、こうした方法で進められる劇あそび全体を通しての考え方は、心とからだとが一体であることに立脚しています。内的なこころの動きが必ずからだにあらわれるもので、コトバも行動も内的なもの要求で必然性をもって表現されるものだとい

うことです。そのころの動きを自由に現
わせる場を作ってやるのが保育室の大切
な仕事で、まずいろいろな抵抗をとってや
り、安定した場に設定してやることから始
まるわけです。かたまっているところとか
らだをいろいろな方法でもみほぐしてやる
こと、面とむかって話しあうことよりオモ
チャの電話器を使うとか、手袋の指人形を
使って話させるとか、かぶりものをつける
とかの方法をとってやります。そうしたこ
どもの身体的行動を通して、教師は子ども
のころをつかまえていくというやりかた
を考えているのです。

そしてこどもの実体を知り、その上にた
って保育していこうとするわけで、教師と
して極めて謙虚な心構えに立つものだと思
っています。いわば幼児教育のレアリズム
とも考えられます。そして基をなすものは
人間尊重の精神であり、幼児をひとりの人

として尊んでいこうとするものです。

わたしのところの校医のK氏がこういう
例を挙げてくれました。患者で来る三才ぐ
らいの子どもにも、もし母親が、注射しない
約束で連れて来たというなら、注射をしな
いでのみ薬をわたし「きょうは注射しない
お約束だから注射しません。おくすりをあ
げます。これをのんでもしまだ苦しいよう
だったらもう一度いらっしやい。こんどは
注射しますよ。注射をすればきつとなおる
からね。」というのです。つぎにお医者さん
へいくというときは覚悟して来るから、泣
いてもチャンと注射をうけるという話なの
です。どんな小さな子どもでも、ひとりの
人としてとり扱かわれ、尊重されることに
喜びと誇りを感じるものだということがわ
かります。

わたしたちの方法も全くそれと精神を同
じくするもので、幼児を尊重し認めていく

ことから出発するわけです。ともすれば幼
児教育には古くから伝承された定型的なも
のがあったようです。幼稚園へ入ることが
そもそも特殊な家庭であり、要求されるの
もお行儀よい子、おとなしいすなおな子だ
けだったようです。ていねいに畳に手をつ
いてごあいさつする子であり、なんでも物
に「お」の字をつけたコトバを持つ子であ
ったようです。まだ過去の残滓がのこされ
ており、お坊ちゃまお嬢ちゃまあつかいを
したり、おの字もやたらに使われていると
ころがあるような話もきいています。

いま、庶民の教育となった幼稚園教育―
―義務教育化の叫びさえある今日―が特
殊な温床教育風なものであってはならない
と思います。そういう意味からも、この方
法が新しい出発になっていくであろうこ
とを信じているわけです。

(東京都台東区立富士幼稚園長)